

酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針 ー 変革の時代を切り拓く、酪農と肉用牛生産の新ビジョン ー

(令和7年4月策定)

情勢の変化

- 食料・農業・農村を取り巻く情勢変化に対応するため、食料・農業・農村基本法を改正
- 生乳や牛肉の需給緩和による脱脂粉乳の在庫の積み上がりや枝肉・子牛価格の低下
- 資材やエネルギー価格の高騰等による、飼料費を始めとした生産コストの上昇・高止まり
- 国内人口が減少傾向にある中、生産年齢人口の減少による労働力不足の加速化
- 環境や持続性に配慮した畜産物生産の必要性の高まり

目指す方向性

需要に応じた生産の推進

需要拡大に取り組みつつ、需要に応じた生産を推進し、需給ギャップの解消を図ります。生産数量の目標は毎年検証を行っています。

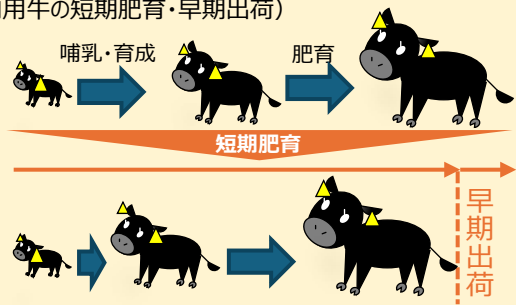
生産数量	現状値 (令和5年度)	5年後目標 (令和12年度)	長期的な姿 【参考値】
生乳	732万 t	732万 t	780万 t
〔地域別の例 : 北海道〕	417万 t	428~445万 t	
牛肉	35万 t	36万 t	37万 t

※牛肉は部分肉換算

生産コスト高への対応

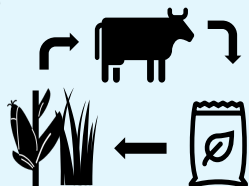
生産コストの低減・生産性の向上に向け、乳用牛の長命連産や、肉用牛の早期出荷などを推進します。

(肉用牛の短期肥育・早期出荷)



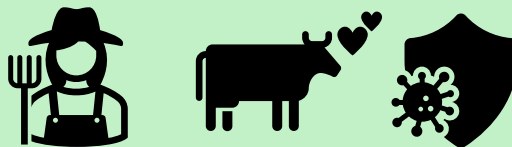
国産飼料の生産・利用拡大

食料安全保障の確保や畜産経営の安定、資源循環等の観点から、国産飼料の生産・利用拡大を通じ、輸入飼料依存度の低減を進めます。



持続的な畜産の推進

労働力不足への対応や、家畜衛生対策、アニマルウェルフェア、温室効果ガス排出削減対策等を推進します。



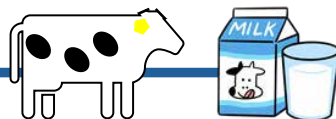
関係者一丸で生産基盤の維持・強化や経営の安定を図り、
将来に向けた展望を描く

生産者や関係者が誇りを持ち、
若い世代にも魅力のある畜産業へ



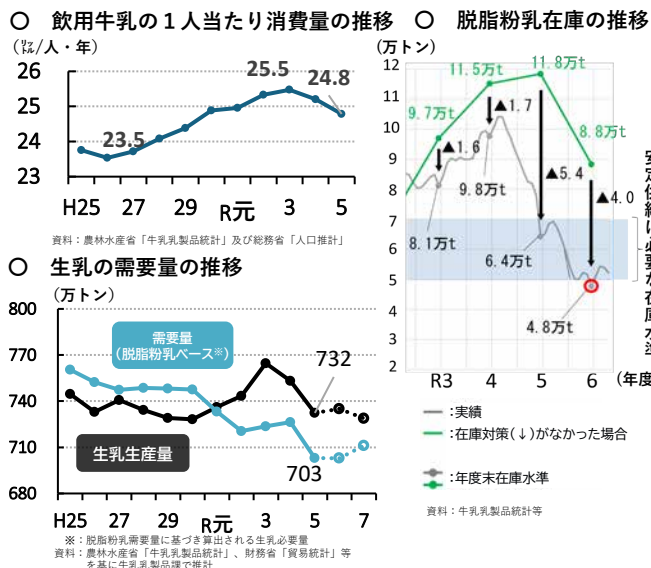
(本文はこちら)

1 生乳需給と酪農経営



需給等の現状と課題

- ◆ 生乳の需給状況については、
 - 飲用牛乳の消費量は、他飲料との競合や人口減少等により、令和3年をピークに減少傾向。
 - 加工原料乳はバター等の需要が好調な一方、脱脂粉乳の需要が低迷。
- ◆ 平成29年以降、生産者の出荷先が多様化した一方、需給調整の負担が一部の者に偏る状況も発生。
- ◆ 将来にわたり必要な国産生乳生産基盤を確保するためには、酪農・乳業者等の関係者と国や地方公共団体は、需要の拡大とともに、計画的な生乳生産を進めていく必要。



今後の推進方向

令和12年度の生産数量目標：732万t
長期的な姿(参考値)：780万t



➤ 需要拡大・需要に応じた生産の推進

- ◆ 特に牛乳と脱脂粉乳に関して、酪農・乳業の関係者、国や地方公共団体が目線を合わせ、需要喚起対策を拡大する必要があります。
- ◆ 商流構築、輸出先国ニーズへの対応により牛乳乳製品の輸出を促進します。

➤ 需給調整機能の強化

- ◆ 生乳出荷の年間安定取引に向け、契約遵守及び規律強化を推進します。
- ◆ 全国的な生乳需給調整への参画・拠出を促すため、主要な補助事業にクロス・コンプライアンスを導入します。

➤ 酪農生産基盤の維持強化・経営の安定

- ◆ 生産者が種付け率等を判断できるよう、生産基盤を見通すために必要な飼養頭数や生乳の需給状況に関する情報発信を強化します。
- ◆ 長命連産性に優れた乳用牛群への転換等によりコストの削減を図ります。
- ◆ 土地や労働力の経営資源に見合った生産規模の実現を推進します。

➤ 集送乳及び乳業の合理化

- ◆ 集送乳施設の整備や生乳流通の広域調整により、輸送距離や荷待ち時間の削減に取り組みます。
- ◆ 中小飲用工場の再編・合理化や地域における生乳生産の実態も踏まえた丁寧な対話を通じ、乳製品加工基幹施設の高度化を推進します。

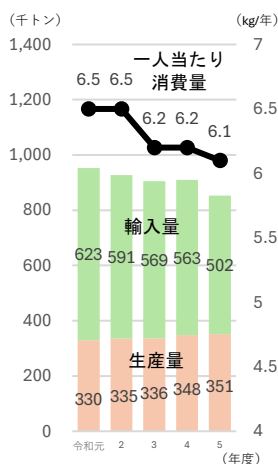




需給等の現状と課題

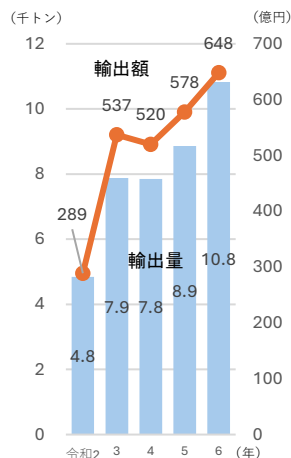
- ◆ 1人当たり消費量は中長期的に増加してきたが、令和3年度以降は物価上昇等に伴う消費者の生活防衛意識の高まり等で減少傾向。
- ◆ 国内生産量は増加傾向で推移。
- ◆ 脂肪交雑の多い霜降りから適度な脂肪交雑や赤身肉など消費者ニーズは多様化。
- ◆ 輸出は直近5年間で約2倍(36の国・地域に648億円、10,826トン)になり、堅調に増加。

○ 牛肉消費量の推移



(出典) 農林水産省「食料需給表」「食肉流通統計」
財務省「貿易統計」

○ 牛肉輸出量・輸出額の推移



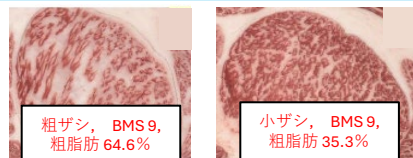
※生産量、輸入量は部分肉換算。
輸出量は正肉、牛くず肉、加工品の合計。ただし、令和3年以前は加工品を除く。

今後の推進方向

令和12年度の生産数量目標 : 36万t
長期的な姿(参考値) : 37万t

➤ 多様な消費者ニーズに応じた生産の推進

- ◆ 和牛特有の脂肪交雑の強みを残しつつ、食味につながるオレイン酸や脂肪交雑の形状などに着目した改良・研究を進めます。
- ◆ 多様な肥育形態の選択肢の一つとして、適度な脂肪交雑や値ごろ感のある牛肉を生産する短期肥育・早期出荷等を推進します。



同じ脂肪交雑基準(BMS)でも脂肪含量が異なる

➤ 輸出拡大への取り組み

- ◆ オールジャパンでの認知度向上、産地での商流構築を推進します。
- ◆ 輸出先国ニーズに対応した食肉処理施設の整備・認定を推進します。



➤ 肉用牛の生産基盤強化・経営の安定

- 繁殖**
- ◆ 和牛の遺伝的多様性に配慮した種雄牛造成や雌牛の改良を行います。
 - ◆ 土地や労働力の経営資源に見合った生産規模の実現を推進します。

- 肥育**
- ◆ 栄養価の高い青刈りとうもろこしの活用や、国産稲わらの利用拡大を図ります。



➤ 肉用牛及び牛肉の流通合理化

- ◆ 地域の実情に即した家畜市場の再編を推進します。
- ◆ 食肉処理施設の再編・合理化、食肉卸売市場の集分荷機能強化を図ります。

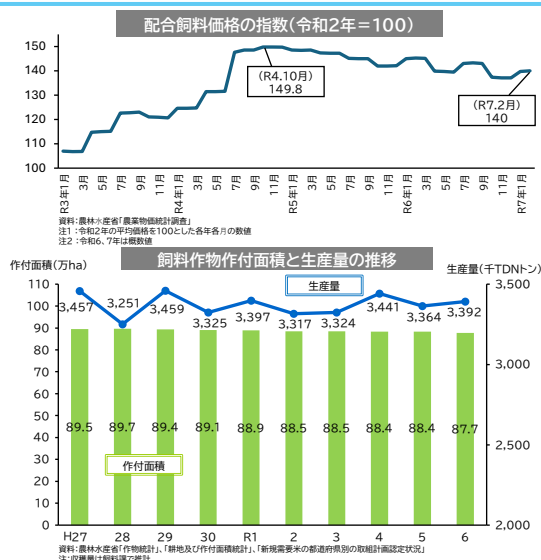


3 飼料需給と国産飼料の生産・利用拡大



需給の現状と課題

- ◆ 国産で賄うことの困難な濃厚飼料の給与割合が増加。粗飼料は2割を輸入乾牧草が占める。
- ◆ こうした中、国際情勢や為替などの影響により、飼料を始めとする生産資材のコストが増加し、畜産経営に影響を与えた。
- ◆ 他方、国産飼料の生産は、食料安全保障の観点からも重要であるが、効率的に生産できる農地や労働力の確保、輸送コストに課題。



今後の推進方向

令和12年度の飼料作物の作付面積目標：101万ha
生産量目標：409万TDNTン

- 国際情勢に左右されにくい畜産経営に向けた、国産飼料基盤に立脚した安定的な畜産経営への転換
- ◆ 限られた農地や労働力を有効活用しつつ、国産飼料の生産・利用を拡大するため、現場の実態を調査・検証し、田畑における耕畜連携の在り方などを検討します。
- ◆ 耕畜連携に向け、必要とする飼料の種類や数量、品質の情報を提供するなど畜産農家から耕種農家への働きかけを促します。
- ◆ 飼料生産を地域計画の中で位置付けるよう促します。
- ◆ 飼料生産組織の運営強化、草地の整備等を図り、粗飼料を中心とした国産飼料の生産・利用を推進します。
- ◆ 飼養管理の省力化等につながる放牧の更なる活用や公共牧場の有効活用を推進します。



飼料生産の地域計画への位置付け



飼料生産組織の運営強化



草地整備



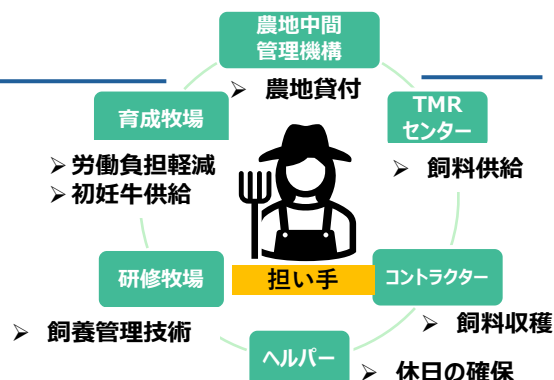
放牧の推進

飼料流通の合理化

- ◆ 飼料輸送の作業にかかる負担削減・安全性確保や、長距離・長時間輸送の削減などの飼料流通の合理化を進めます。

担い手の確保、経営力の向上

- ✓ 農地や畜舎、家畜導入など初期投資の負担軽減を図り、新規就農を促します。
- ✓ スマート農業技術や経営データの活用により、経営力の向上を図ります。



労働力不足への対応

- ✓ 酪農・肉用牛ヘルパー組織の運営安定化や人材の確保・育成・定着を図ります。
- ✓ 労働負担の軽減や生産性の向上に資する省力化機器の導入を推進します。

酪農・肉用牛経営で活躍する省力化機器



搾乳ロボット

餌寄せロボット



自動給餌機



哺乳ロボット

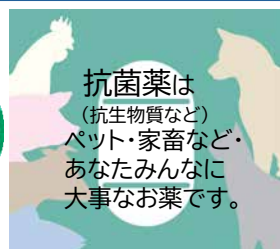
家畜衛生対策の充実・強化

- ✓ 家畜伝染病の侵入防止に向け、出国前広報の実施や、荷物のX線検査技術の導入を進めます。
- ✓ ワクチンなどの予防技術の開発や飼養衛生管理の向上を推進します。

事前対応型の広報
ポスター掲示・注意喚起飼養衛生管理基準の
遵守徹底

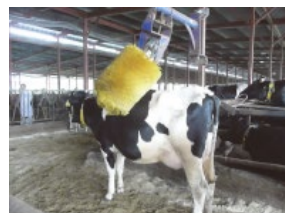
安全確保の取組の推進

- ✓ GAP・HACCPの活用や、動物用医薬品や飼料等の安全確保を推進します。
- ✓ 薬剤耐性対策として抗菌薬の慎重使用を推進します。



アニマルウェルフェア（AW）の推進

- ✓ 国際基準に沿ったAWに関する飼養管理指針の普及定着を推進します。
- ✓ 消費者を含む関係者への理解醸成を図ります。

寒い時期の子牛に、保温性の
優れたジャケットを装着身繕いに利用できるカウブラシを
牛舎内に設置

4 持続的な畜産経営に向けた取組

● 環境と調和のとれた畜産経営

- ✓ 耕種農家のニーズに合わせた堆肥を生産し、資源循環を推進します。
- ✓ 温室効果ガス削減に資する技術の活用や、削減量の見える化を推進します。



● 自然災害に強い畜産経営の確立

- ✓ 日頃からの様々な災害を想定した準備、チェックリストや農業版BCPも活用しつつリハーサル・訓練など、日頃からの備えを促します。



● 暑熱対策の推進

- ✓ 家畜への送風や散水、日よけ、屋根への消石灰の塗布等の暑熱対策への計画的な取り組みを推進します。
- ✓ 気象条件を踏まえた適切な草種・品種の選択などを推進します。



● 経営安定対策及び配合飼料価格安定制度の着実な運用

- ✓ 畜種ごとの特性に応じた経営安定対策を、引き続き実施します。
- ✓ 配合飼料価格安定制度について、制度の持続性を高めるため、運用改善を図ります。

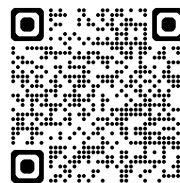
● 消費者理解の醸成

- ✓ 畜産業の意義や、持続的な供給に向けた適正価格、国産飼料の利用、環境負荷低減の取組について、生産・加工・流通・消費の各段階に向けた情報発信を推進します。

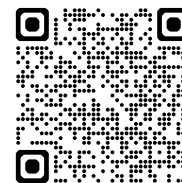


「家畜改良増殖目標」及び 「鶏の改良増殖目標」(令和7年4月策定) のポイントについて

令和7年4月
農林水産省畜産局畜産振興課



「家畜改良増殖目標」本文はこちら



「鶏の改良増殖目標」本文はこちら

改良増殖目標とは

■家畜の改良増殖を行う意義

- 家畜の改良増殖は、**家畜の生産性の向上を図るため**、乳量、肉量、肉質等の**遺伝的能力の高い家畜を作出して、より能力の高い家畜を増殖**させていこうとするものであり、その成果は、（畜産物の）生産性の向上を通じて**畜産の振興や農業経営の改善**、ひいては**国民食料の安定的供給に資する**ものである。
（出典：家畜改良増殖法の解説）

■新たな改良増殖目標（10年後※）を定めるに当たって

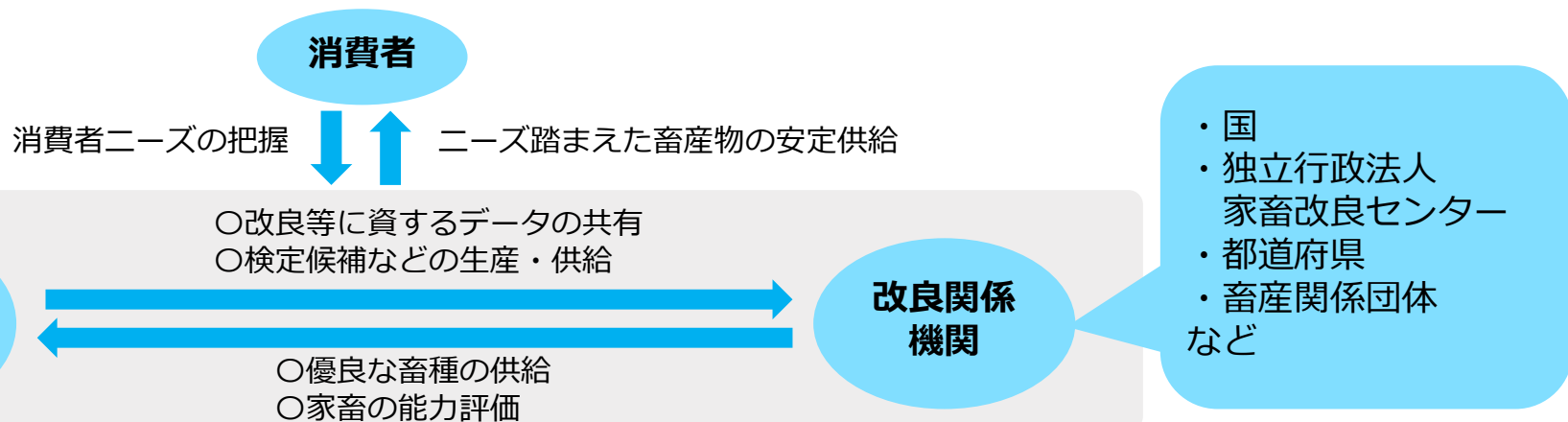
※鶏は他の畜種に比べライフサイクルが短く改良の効果が現れるスピードが速いことから、目標年度は他の畜種の10年後とは異なり、5年後。

新たな家畜改良増殖目標の策定にあたっては、**これまでの改良の方向性を基本としつつ**、

- 畜産農家の高齢化や後継者不足の進展、飼料等の資材コストの高止まり等により、**省力的・効率的な飼養管理の下でも高い生産性を発揮できる家畜**が求められている。
- 国産畜産物の国内外での需要を一層拡大するため、**国内の多様な消費者ニーズや輸出需要に対応した畜産物生産のための基盤強化**を図る必要がある。
などの情勢を踏まえ策定。

■改良増殖を推進する連携体制

- 改良関係機関と生産者が協力し、消費者ニーズを踏まえながら改良増殖を推進することが重要



家畜及び鶏の改良増殖目標のうち改良目標のポイント

乳用牛

- 長命連産性の向上や需要に応じた生乳生産のため、疾病抵抗性の評価を開始するとともに、バランス良く乳量・乳成分を改良。
- 暑熱耐性の改良の推進、飼料利用性等の導入などによる日本の飼養環境に適した改良を推進。
- 極端な大型化の抑制、搾乳ロボットへの適合性が高い牛へ改良。

豚

- 肢蹄に関する評価指標の改良現場での活用の推進。
- 生産コスト低減を図るため、1頭当たり育成頭数の改良を推進。
- 多様な消費者ニーズに対応するため、ロース芯への脂肪交雑を高める等により食味の向上を図り、海外産豚肉との差別化を推進。

めん羊・山羊

- 優良な種畜を確保するため、家畜人工授精技術等を利用した能力の高い種畜の生産及びその供給を推進。
- 生産性等の改良データの収集体制の検討・構築を推進。

肉用牛

※目標年度は策定時の10年後の令和17年度、鶏は5年後の令和12年度。

- 多様な消費者ニーズに対応するため、オレイン酸等の食味の向上に重点を置いた改良や研究等を推進。
- 食味、繁殖性、飼料利用性等、新たな改良形質に着目した改良の推進により、遺伝的多様性を確保。
- 肥育形態の1つとして、適度な脂肪交雑で、生産コストの低減等が期待できる短期肥育・早期出荷を推進。

馬

- 生産基盤強化のため、優良な種雄馬及び繁殖雌馬の確保と適切な利用に加え、家畜人工授精・受精卵移植技術の改善、理解醸成、普及を推進。

鶏

- 卵用鶏については、長期にわたり高い産卵性を維持する改良を推進。
- 肉用鶏については、生産コストを低減するため、飼料要求率と育成率の改良を推進。
- 国産鶏種（地鶏等）については、特色ある品質を保持しつつ、生産コストの低減を推進。

乳用牛の改良増殖目標のポイント

現状と課題

- 新型コロナウイルスの感染拡大以降、**特に脱脂粉乳需要の減少**から生乳需給は緩和。
- 乳用牛1頭当たりの乳量は年々増加している一方、**供用期間は短縮し、受胎率も低下**傾向。
- **酪農の労働時間は長く**、高齢化の進展等により**労働力不足**が顕在化。
- **温暖化等の環境の変化への適応**や、**アニマルウェルフェア（AW）に配慮した飼養管理**などの対応が必要。

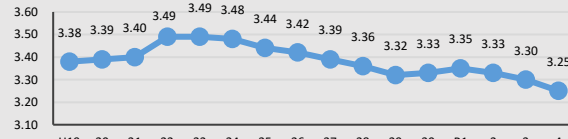
主な方向性

- 需要に応じた生乳生産や長命連産性の向上のため、バランス良く乳量・乳成分を改良するとともに疾病抵抗性の評価を開始。
- 極端な大型化の抑制、搾乳ロボットへの適合性が高い牛へ改良。
- 暑熱耐性の改良の推進、飼料利用性等の導入などによる日本の飼養環境に適した改良を推進。

バランス良い泌乳形質の改良と長命連産性の向上

- 繁殖性等の他の改質とのバランスを確保した上で乳量の改良を推進する。
- 将来的な需要の変化に対応するため、NTP※1のうち乳脂量の割合を見直す。
- 繁殖性や耐久性に重点を置いた改良や疾病抵抗性の評価による長命連産性の向上を推進する。

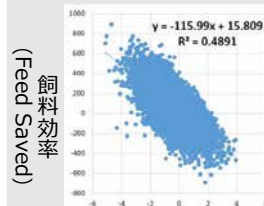
平均除籍産次の推移



※1：産乳・耐久性・疾病・繁殖などの要素を加味した、種雄牛を選抜するための総合指数。

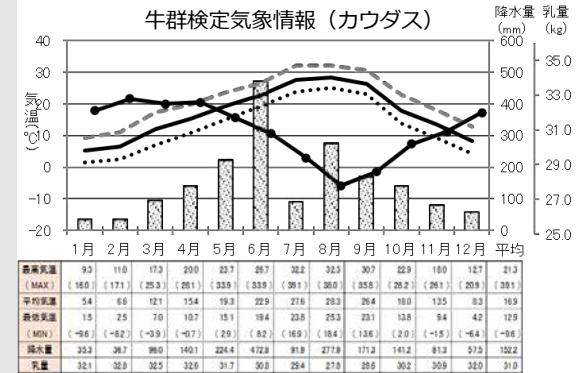
大型化の抑制 搾乳ロボット適合性

- 極端な大型化を抑制するため、適正な大きさについて検証する。
- 搾乳ロボットへの適合性を高められるよう、種雄牛に係るロボット適合範囲の情報提供を推進する。



暑熱耐性や飼料利用性等の日本の飼養環境に適した改良

- 暑熱耐性などの評価方法の改善を検討するとともに、飼料利用性等の新たな評価を検討する。



牛群検定成績等の提供方法等の工夫

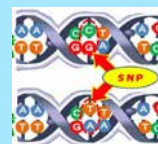
生産者や地域の指導機関等が活用しやすいよう、牛群検定成績等の情報提供の方法等を工夫する。



改良速度の加速化とゲノミック評価の理解醸成

ゲノミック評価の信頼性確保やヤングサイア※2の利用促進により改良速度を加速化する。

※2：ゲノミック評価により能力が高いと推定され、娘牛の成績を持たない若齢の種雄牛。



AWに配慮した飼養管理

AWに配慮した飼養管理は、長命連産性の向上にも貢献。牛個体ごとの能力の把握と適切な飼養管理を促進する。



肉用牛の改良増殖目標のポイント

現状と課題

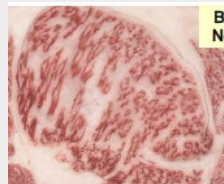
- 生産現場の多くでは、**脂肪交雑を重視した和牛生産**となっている中で、
 - ① **消費者ニーズは多様化。**
 - ② 和牛全体での**近交係数が上昇し、遺伝的多様性の喪失が懸念。**
- 飼料価格の高止まり等により**生産コストが増加**する一方、牛肉需要の減退により**枝肉価格は低迷**しており、**より効率的な肉用牛生産が必要。**

主な方向性

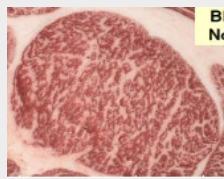
- 多様な消費者ニーズに対応するため、オレイン酸等の食味の向上に重点を置いた改良や研究等を推進。
- 食味、繁殖性、飼料利用性等、新たな改良形質に着目した改良の推進により、遺伝的多様性を確保。
- 肥育形態の1つとして、適度な脂肪交雑で、生産コストの低減等が期待できる短期肥育・早期出荷を推進。

食味の向上に重点を置いた種畜の選抜・利用

- 脂肪の質を始めとする食味の向上に重点を置いた種雄牛及び繁殖雌牛の選抜・利用を推進する。
- 牛肉の食味や脂肪交雑の形状に関する指標の研究を進め、改良の指標として取り入れるための評価手法を検討する。



粗ザシ, BMS 9,
粗脂肪 64.6%



小ザシ, BMS 9,
粗脂肪 35.3%

飼料利用性の指標化・実用化

- 飼料利用性に関する指標化を検討する。
- 蓄積されたデータを基に遺伝的能力評価に着手し、種畜の選抜手法の実用化を推進する。



肥育期間中の濃厚飼料・粗飼料の摂取量を調査

データ蓄積



SNP解析 【ゲノミック評価】



採血、DNA抽出

短期肥育・早期出荷の推進

- 短期肥育・早期出荷の普及に向けた実証に取り組み、生産現場への定着を推進する。
- 早期出荷牛肉に関するデータ収集・分析を行い、流通及び消費者サイドの認知度向上及び理解醸成を促進する。

生産～販売までの一体的な取組の推進



分娩間隔の短縮、初産月齢の適正化

繁殖能力に優れ、生涯生産性の高い種畜を選抜することによる分娩間隔の短縮や初産月齢の適正化を推進する。

新たな形質に係るデータの収集と活用、遺伝的多様性の確保

食味、飼料利用性、繁殖性などの新たな改良形質に着目したゲノミック評価や種雄牛造成などを推進し、遺伝的多様性の確保を図る。

アニマルウェルフェアに配慮した飼養管理

肉用牛が本来持つ繁殖性や増体性などの能力を十分発揮させるため、アニマルウェルフェアに関する指針の周知及び普及を推進する。11

豚の改良増殖目標のポイント

現状と課題

- 家畜伝染性疾病による遺伝資源喪失リスクが高まっており、食料の安全保障の観点からも**国内で遺伝資源を確保し、純粋種豚の改良体制を維持**していくことが重要。
- **産肉能力**については、我が国で求められているニーズに対応しつつ食味も含めた**肉質の更なる改良**が必要。
- **コスト低減に資する改良や衛生管理の取組**を推進する必要がある。

主な方向性

- 消費者ニーズに対応するため、脂肪交雑の増進等による食味の向上を図り、海外産豚肉との差別化を推進。
- 生産コスト低減を図るため、1腹当たり育成頭数の改良を推進。
- 能力の発現を最大化させるため、肢蹄に関する評価指標の活用を推進。

消費者ニーズに対応する 産肉能力の改良

- 国産豚肉全体の食味の向上を図るため、デュロック種については、ロース芯への脂肪交雑の増進等により食味の向上を図る。
- 生産コストの低減を図る観点から、各品種とも、1日平均増体量の向上により、肥育豚の出荷日齢の短縮を図る。



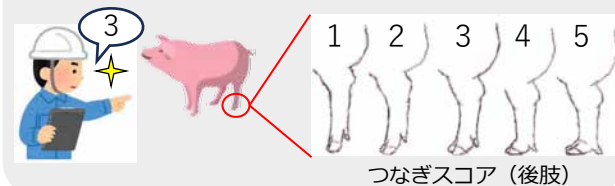
生産コスト低減に資する 繁殖能力の改良

- 純粋種豚の1腹当たり育成頭数の向上に着目した改良を強化することで、肥育素豚生産用母豚の繁殖能力をさらに高める。
- 繁殖能力の改良を効率的に進めるため、国産純粋種豚改良協議会等の協力体制を強化する。また、種豚農家における育種価情報の適切な活用を推進する。



能力の発現を最大化させる 体型の改良

- 強健で肢蹄が強く、発育に応じて体各部の均称がとれた体型への改良を図る。
- 肢蹄に関する評価指標の現場での実践に向け、判定の均一化・精度向上を図る。
- その他、体型に関する簡易な評価が可能な改良形質について引き続き検討する。



純粋種豚の維持・確保

純粋種の多様性を維持しつつ、能力向上と優良な改良素材の活用を推進するとともに、改良に必要なデータを収集・分析できる体制の構築を検討する。

伝染性疾病への対策

慢性疾病も含む伝染性疾病の発生予防・まん延防止のため、飼養衛生管理基準の遵守の徹底やオールイン・オールアウトの導入等を推進する。

アニマルウェルフェアに配慮した飼養管理

豚が本来持つ能力を十分発揮させるため、アニマルウェルフェアに関する指針の周知及び普及を推進する。

馬の改良増殖目標のポイント

現状と課題

- 重種馬：生産者の高齢化や担い手不足等により生産基盤の弱体化が進行しているため、担い手確保とともに改良面での基盤強化が必要。
- 軽種馬：内国産馬の能力向上が図られている一方、利用する血統が偏重。
- 乗用馬：競技等の利用に加え、ホースセラピー等利活用の幅を広げる必要。

主な方向性

- 生産基盤強化のため、用途に応じた①優良な種雄馬及び繁殖雌馬の確保と適切な利用、②担い手や生産を支える技術者等の確保及び技術の向上等の推進、③家畜人工授精技術等の改善とその活用に向けた理解醸成により普及を推進。
- 更なる利活用の幅を広げるため、多様な利活用に係る情報の収集・共有を推進。

重種馬

- ・ 近交係数の上昇に留意した上で、強健性、増体性及び飼料利用性の向上に努める。
- ・ 優良な種雄馬及び繁殖雌馬の維持、確保及び適切な利用に努める。
- ・ 繁殖雌馬において、受胎率、生産率等の繁殖能力の向上を図る。



軽種馬（競走用馬）

- ・ 国際的に通用する、強靱でスピードと持久力に優れた競走能力の高いものとする。
- ・ 血統の多様性に配慮し、血統情報等を活用した交配に努める。



乗用馬・日本在来馬

- ・ 乗用馬は、温順で乗りやすいものとする。競技用は、運動性に富み、飛越能力、持久力等に優れたものとする。
- ・ 日本在来馬は、各品種の特性を踏まえた利活用を推進する。また、家畜人工授精技術等も活用し、希少性に配慮した品種の保存に努める。



技術研修会等の開催

技術研修会等の開催を通じて、担い手や馬に関する技術者及び指導者等を確保するとともに、繁殖技術の改善・普及を図る。



繁殖管理技術の向上

繁殖雌馬においては、各個体の状態等に配慮した上で、発情・授精適期の把握等を徹底し、空胎期間の短縮を図る。



アニマルウェルフェアに配慮した飼養管理

馬が本来持つ能力を十分に発揮させるため、アニマルウェルフェアに関する指針の周知及び普及を推進する。

めん羊・山羊の改良増殖目標のポイント

現状と課題

- 国産羊肉・山羊肉の需要の高まりがみられる中、国内の限られた生産基盤において、種畜を確保し飼養頭数を増加させる必要。
- 多様な利活用が図られる中、技術者・指導者の不足、飼養管理・衛生管理技術の向上に向けた情報提供等が課題。
- 山羊乳を利用したチーズ等の乳製品加工・販売に向けて、乳量の向上等が必要。

主な方向性

- 生産性に優れた種畜を選抜するため、生産性等の改良データの収集体制の検討・構築を推進。
- 優良な種畜を確保するため、家畜人工授精技術等を利用した能力の高い種畜の生産及びその供給を推進。

産肉性・泌乳性に優れた種畜の生産

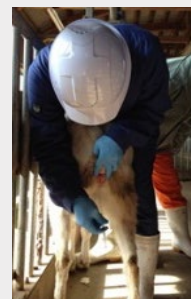
- 優良な種畜の選抜、育成、供給に向けて、関係者との連携の下、生産性に関連するデータの収集、分析する体制の構築に努める。

能力評価ソフト



家畜人工授精技術の活用

- 研修会等の開催を通じた家畜人工授精技術に関する理解醸成と、獣医師等の技術者の育成及び技術の向上を図る。
- 優良な種畜の精液の活用に努める。



生産性の向上

- 確実な発情発見、人工哺乳技術を活用した子羊、子山羊の損耗防止や分娩前後の母羊、母山羊の適正な栄養管理等の実施を図る。
- 疾病の発生予防、まん延防止のため、飼養衛生管理基準の遵守の徹底を図る。



多様な利活用の推進

採食特性を生かした耕作放棄地等の景観維持や、ふれあい教育等の多様な利活用に関する価値・魅力の発信を図るとともに、留意すべき法制度等の周知・徹底を図る。



適切な飼養管理

めん羊・山羊が本来持つ能力を十分に発揮させるため、暑熱等の環境ストレスの軽減や、増体性に影響を及ぼす寄生虫への対策等に努める。

鶏の改良増殖目標のポイント

現状と課題

- 多様な消費者ニーズに対応した鶏卵・鶏肉の安定供給と生産コストの低減等に資するため、国産鶏種の改良・増殖等に引き続き取り組むことが必要。
- 輸入規制等のリスクに備え、国内育種資源の多様性及び選択枝の確保並びに種鶏の安定供給が重要。

主な方向性

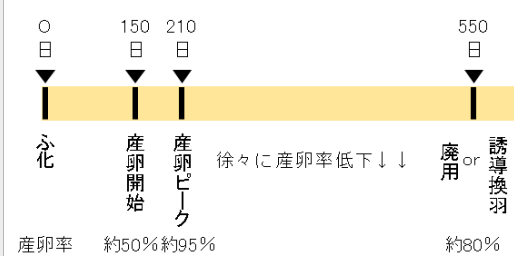
- 卵用鶏：長期にわたり高い産卵性を維持する改良を推進。
- 肉用鶏：生産コストを低減するため、飼料要求率と育成率の改良を推進。
- 国産鶏種（地鶏等）：特色ある品質を保持しつつ、生産コストの低減を推進。

【能力に関する改良目標】

卵用鶏

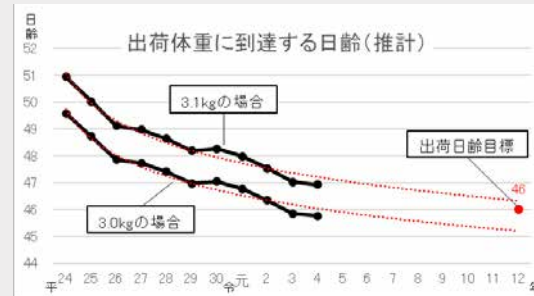
- ・ 長期にわたり高い産卵性を維持する改良を推進する。
- ・ 日産卵量に留意しながら、飼料要求率の維持・向上に努める。

卵用鶏のライフサイクル



肉用鶏（ブロイラー）

- ・ 増体の低下につながらないように留意しながら、飼料要求率の改善に努める。
- ・ 飼料要求率の改善と増体性の向上を踏まえた、適正な日齢での出荷を推進する。



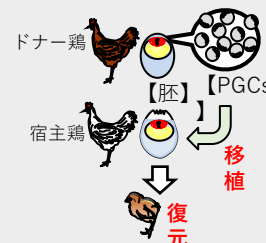
国産鶏種（地鶏等）

- ・ 特色ある品質を保持しつつ、合理的な価格水準で供給が図られるよう、生産コストの低減を推進する。
- ・ 安定的な雛の生産・供給を図りながら、消費者等の認知度を高める取組を推進する。



【能力向上に資する取組】

- ① 遺伝資源の保存や改良増殖に貢献する始原生殖細胞（PGCs※）の保存等の技術習得及び普及体制について、関係者間で連携体制の構築を図る。



- ② （独）家畜改良センター、都道府県及び民間の関係機関が連携し、国産鶏種の増体性や繁殖性の向上に努め、安定供給を図る。
- ③ 国産鶏種の肉質等の特徴を保持しつつ、アニマルウェルフェアの向上等を図るため、喧噪性を低減させるための飼養管理手法や改良手法について検討する。

※ 受精卵の胚に出現する、将来精子や卵子になる細胞（Primordial Germ Cells）。この細胞を保存し利用することで、疾病等により途絶えた遺伝資源の再生や近交係数の上昇を抑制する改良体制の構築に資することが可能。

家畜及び鶏の改良増殖目標のうち増殖目標のポイント

乳用牛

○我が国の乳用牛改良基盤を維持するとともに、牛乳・乳製品の安定的な供給を確保し、牛乳・乳製品の需要動向に即した生産を行うことを旨として頭数目標を設定。

総頭数 127万頭（現在133.5万頭）
うち2歳以上の雌牛頭数 86万頭（現在 89万頭）

豚

○豚肉の需給動向に即した生産を行うことを旨とした飼養頭数を設定。

総頭数 790万頭（現在 916万頭）

めん羊

○種雄羊及び繁殖雌羊を含め、需給動向に応じた頭数となるよう努める。

山羊

○乳用、肉用のほか、多様な利活用に対するそれぞれの関心の高まりを踏まえ、需要動向に応じた頭数となるよう努める。

肉用牛

※目標年度は策定時の10年後の令和17年度、鶏は5年後の令和12年度。

○牛肉の需要動向に即した生産を行うことを旨として、飼養頭数目標を設定。特に、希少血統の維持に留意しつつ遺伝的能力評価に基づく優良な繁殖雌牛の増頭を図り、足元の改良基盤を充実させた上で、今後の需給状況に合わせた和子牛生産を推進。

総頭数 290万頭（現在 268万頭）
うち肉専用種 219万頭（現在 189万頭）
うち乳用種・交雑種 71万頭（現在 79万頭）

馬

○利用目的ごとの需給動向に応じた頭数となるよう努める。

鶏

○鶏卵・鶏肉の需要動向に即した生産を行うことを旨として、飼養羽数の目標を設定。

卵用鶏 172百万羽（現在172百万羽）
肉用鶏 141百万羽（現在141百万羽）

○また、多様化する消費者のニーズに応え、特色ある鶏の増殖に向けた種鶏の羽数が十分に確保されるよう努める。

家畜排せつ物の利用の促進を図るための基本方針

(令和7年4月策定)

情勢の 推移

- 肥料価格高騰等による肥料の国産化に向けた機運の高まり
- 混住化の進展等に伴う畜産関連苦情の深刻化、排水基準など規制への対応
- 環境負荷や持続性に配慮した畜産物生産の必要性の高まり

現状と課題

① 家畜排せつ物の適正管理



・家畜排せつ物法の本格施行から20年が経過する中で、施行までに整備した**堆肥舎等の老朽化**や規模拡大による施設の処理能力不足の顕在化

② 堆肥の生産・利用拡大・流通



・近年の為替の変動や世界情勢の変化等による食料安全保障上のリスクの高まりを受け、過度な輸入依存からの脱却に向けた**肥料原料や生産資材等の国産化**が課題
・家畜排せつ物の発生量等の地域差から、地域内での堆肥利用を推進してもなお、堆肥の余剰感が生じている地域がある一方で堆肥の入手が難しい地域も存在

③ エネルギー利用



・メタン発酵を行う場合、設備投資効果の確保に加えて、発酵残渣として生じる**消化液を還元するための十分な農地面積の確保**等が必要

④ 環境規制（悪臭・水質汚濁等）への対応



・悪臭は苦情原因の過半を占めており、発生源や農場の立地など様々な要因が関係し、農場ごとに対処しているが、効果的かつ汎用性のある対策が必要
・暫定排水基準が設定されている硝酸性窒素等について、**一般排水基準への移行に向けて、排水の水質向上を図る必要**

⑤ 地球温暖化（GHG）対策



・GHG排出削減の取組が畜産農家の直接的な利益につながりにくい中、どの様に畜産農家側のメリットを示し、意識の向上を図っていくかが課題

⑥ 技術開発の促進



・家畜排せつ物の適正処理・有効利用や地球温暖化対策は重要であるが、直接的な利益につながりにくいこと等から、低コスト化が必要



(本文はこちら)

基本的な対応方向

1

家畜排せつ物の適正管理

- 家畜排せつ物は**畜産農家が自らの責任で適正に処理**しなければならない
- 老朽化した施設の修繕や更新のための費用は計画的に積み立てることが基本
- 経済的負担の軽減にあたっては、**リース事業の活用や低利融資等**の支援が利用可能
- 更新にあたっては、**強制発酵施設等**への機能強化が望ましい

■ 主な支援策

・畜産整備（経営）リース事業
（一般財団法人畜産環境整備機構）



・国内肥料資源利用拡大対策事業
（農林水産省）



2

堆肥の生産・利用拡大・流通

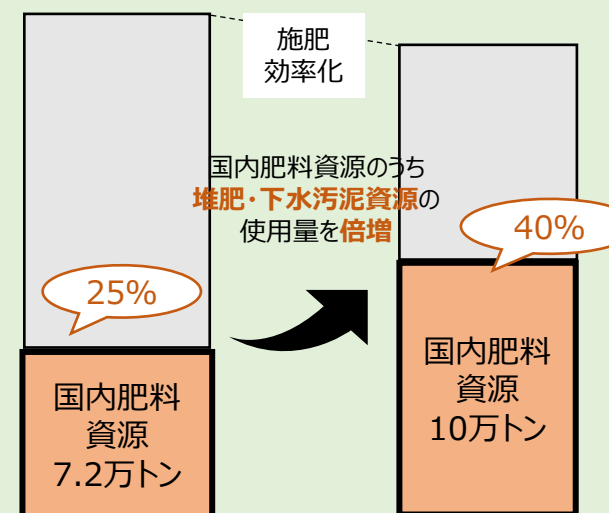
- 国や地方公共団体は、みどり法に基づく**税制優遇や低利融資等のメリット措置を周知**し、積極的な認定取得を推進
- 地方公共団体やJA等が連携し、新規需要の獲得や**機動的なマッチング体制**を整備
- 地域間の堆肥の需給バランス改善に向け、**耕種農家のニーズに合わせた堆肥の高品質化やペレット化**を推進
- ペレット化に取り組む際は、**製造コストや輸送コストと販売価格とのバランス等**の十分な検討が重要

■ 食料安全保障強化政策大綱

（令和4年12月）

基準（2021年）
28.5万トン

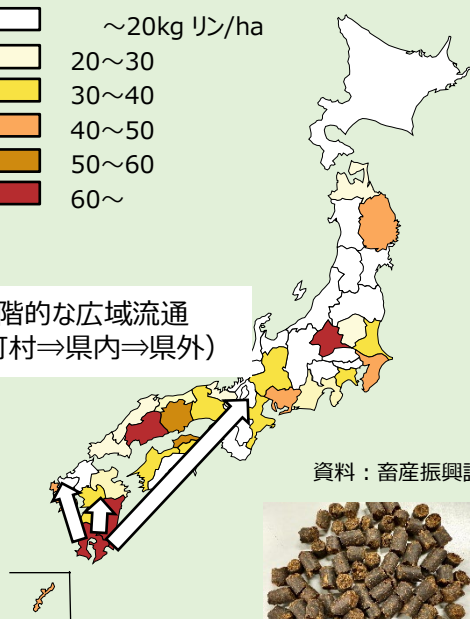
目標（2030年）
25.1万トン



■ 耕地面積当たりの家畜排せつ物発生量 （令和6年）（リンベース）



段階的な広域流通
（市町村⇒県内⇒県外）



資料：畜産振興課作成



ペレット堆肥

KPI：2030年までに肥料の使用量（リンベース）
に占める国内資源の割合を40%まで拡大
（2021年：25%）

基本的な対応方向

3

エネルギー利用

- バイオマス発電は、**消化液等の利用先が確保**でき、施設整備費や維持費を勘案した上で持続可能な場合には、家畜排せつ物処理における有力な選択肢
- FIT／FIP制度のみに依存せず、エネルギーを地域利用する**循環経済地域の創出**を推進
- 消化液は、確実に処理・利用できるよう散布先や不需要期の貯留スペースの確保が必要



メタン発酵バイオマス発電

資料：別海バイオガス発電（株）



副産物（消化液）散布

4

環境規制（悪臭・水質汚濁等）への対応

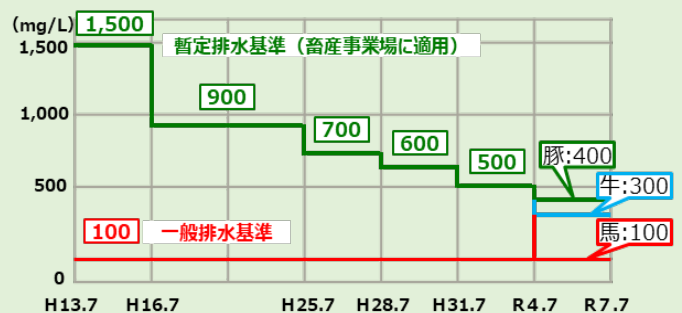
- 地方公共団体の畜産部局は、**環境部局と密に連携**しながら、適正な飼養管理や施設管理が図られるよう指導等を実施
- 悪臭対策は、立地環境や施設構造などの条件に応じて、**複数の手法**の組み合わせを検討。臭気の見える化により悪臭の原因や対策の効果を確認
- 排水対策は、飼養頭数規模に見合う処理施設を備えた上で、ばっ気量の調整など**日々の適切な運転管理**や**専門業者による定期的なメンテナンス**を行うことが重要

臭気の強さをプロットにより表示した地図



資料：愛知県農業総合試験場

硝酸性窒素等の暫定排水基準値



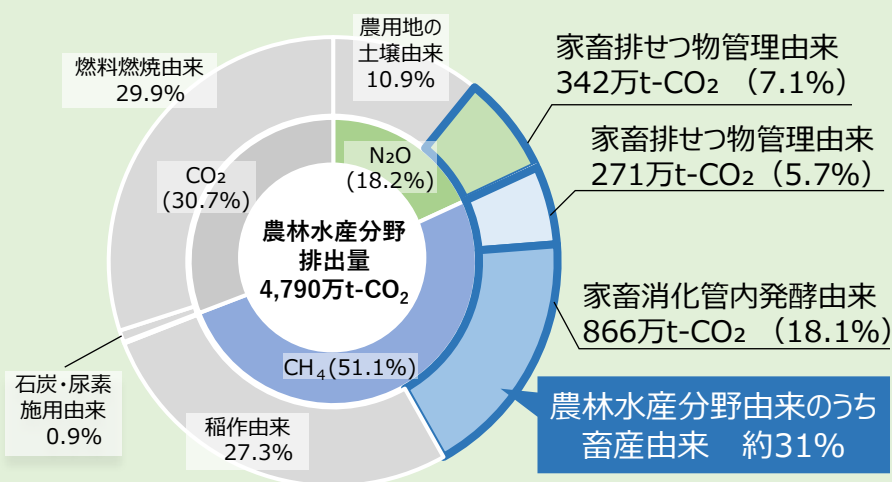
基本的な対応方向

5

地球温暖化対策

- 家畜排せつ物の管理方法の変更による**堆肥の高品質化**、アミノ酸バランス改善飼料の給与による**飼養効率の向上**などのメリットを示しつつ、農家での取組を推進
- Jクレジット制度、特に**プログラム型プロジェクト**の活用を推進
- 畜産物における温室効果ガス削減貢献の「見える化」など、**消費者の理解醸成**を推進

日本の農林水産分野のGHG排出量の内訳



■ 家畜排せつ物の管理方法の変更



堆積型発酵施設

強制発酵施設



みえるらべる

出典：「IPCC第6次評価報告書第3作業部会報告書（2022年）」、温室効果ガスインベントリオフィス（2022年度）＊温室効果は、CO₂に比べCH₄で28倍、N₂Oでは265倍。

6

技術開発の促進

- **低コストで実用的**、かつ、省エネルギー化によるランニングコスト低減など**収益面でのメリットを感じられる技術開発**を促進

- ロボットとAI/IoTを利用したスマート家畜ふん尿処理システムの開発
(国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構)



堆肥化ロボット



BODバイオセンサー
によるばっ気量調整



概要版



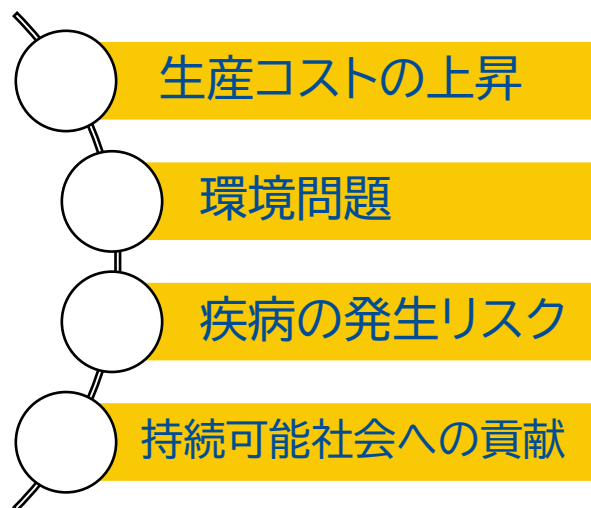
養豚農業の振興に関する基本方針

(令和7年4月策定)

養豚農業の意義

- 豚肉は手頃な価格で購入できる良質なタンパク質として国民生活に不可欠
- 多くの関連産業と結びつき、地域経済の発展と雇用の維持に貢献

現状・課題



- ✓ 飼料費の高止まり
- ✓ 設備投資・獣医療費の増加
- ✓ 労働時間の増加と人手不足
- ✓ 臭気問題、悪臭防止法への対応
- ✓ 水質汚濁防止法への対応
- ✓ 豚熱への対応
- ✓ アフリカ豚熱の侵入リスクの高まり
- ✓ その他慢性疾病による生産性低下
- ✓ 環境負荷低減への取組
- ✓ アニマルウェルフェアへの対応
- ✓ 薬剤耐性菌への対応

基本的な対応方向

生産コストの低減

- 効率的な生産システムの導入
- 各種経営診断の活用
- 優良種豚の活用
- スマート農業技術の活用

ブランド化

- 特色ある銘柄豚の生産
- 国産飼料の利用、環境への配慮による高付加価値化

排せつ物処理の高度化

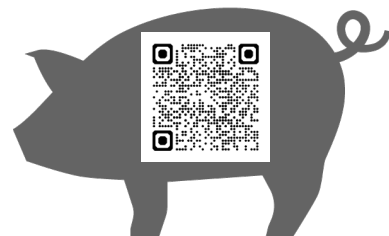
- 脱臭装置や排水処理技術の導入
- 家畜排せつ物の有効活用(堆肥化)
- 温室効果ガス削減技術の普及

疾病対策

- 飼養衛生管理・バイオセキュリティの徹底
- 水際対策の強化
- 獣医療提供体制の整備

持続可能な産業

- アニマルウェルフェアの理解醸成
- 飼養衛生管理の向上・抗菌薬の慎重使用
- 物流への対応



(本文はこちら)



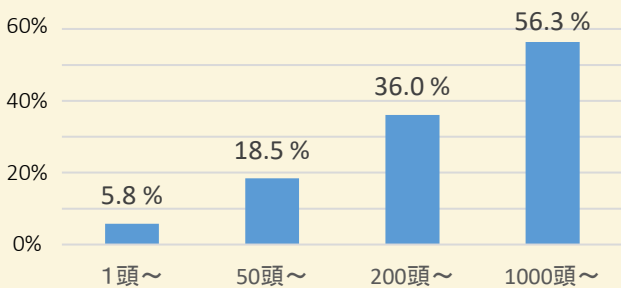
基本方針のポイント



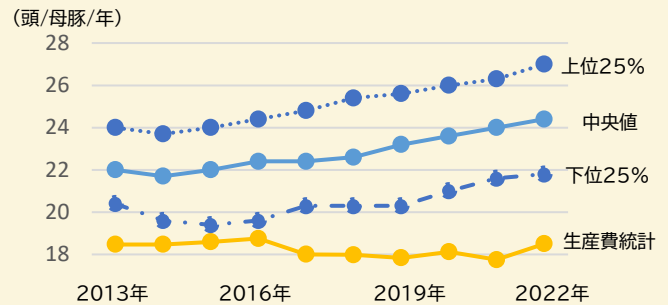
● 経営分析の活用

- ◆ 自農場の成績、経営などを継続して記録し、社内比較を行うとともに、他社の優れた事例を指標として比較・分析し、改善すべき点を見出す「ベンチマーキング」の取組を推進。
- ◆ ベンチマーキングによる経営診断の導入により、1母豚当たりの出荷頭数や飼料要求率等を改善し、経営管理能力の向上を図る。

ベンチマーク加入率(母豚頭数ベース)



ベンチマーク加入者の1母豚当たり年間出荷頭数



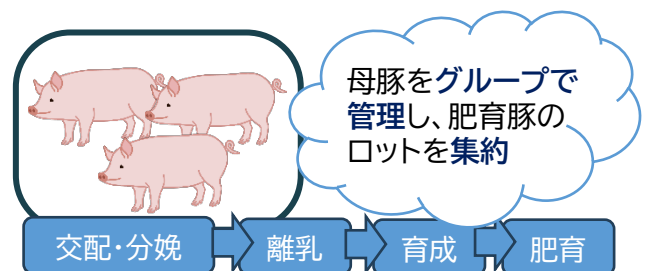
● 飼養衛生管理の高度化

- ◆ グループ生産システムを取り入れた効果的なオールイン・オールアウト方式や、マルチサイト方式の導入を図る。
- ◆ 衛生管理の更なる強化により、疾病の発生リスクを低減することで事故率低減や生産性向上を図ることが可能。

グループ生産システム

母豚を複数のグループに分け、一定の間隔で交配・分娩・離乳を行う管理手法。

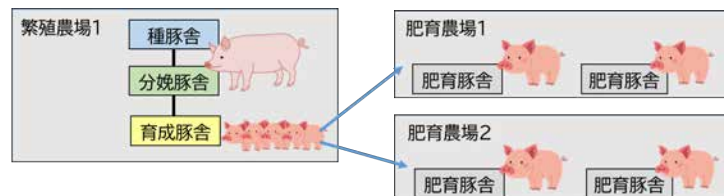
- ・中小規模農家でもオールイン・オールアウト方式がとりやすい。
- ・疾病の制御による生産成績向上が期待。
- ・従事者の休日確保にも有効。



マルチサイト方式

農場を分散させることで、豚の成長過程に適合した飼養衛生管理を可能とする手法。

- ・疾病の制御による生産成績向上、疾病発生時の経営への影響緩和が期待。





基本方針のポイント



スマート農業技術の活用

- ◆ 母豚群飼システムや体重推定機器、豚舎洗浄ロボット等の機械装置の導入により、生産性の向上と省力化を推進。

母豚管理の省力化



母豚群飼システム

肉豚出荷適期の把握



体重推定機器

豚舎洗浄の省力化



洗浄ロボット

自動環境制御

温度調整器・制御盤と連携したカーテンの遠隔制御



ブランド化等による販売力の強化

- ◆ 特定の品種や、米、食品残さ、子実用とうもろこしなどの**国内由来飼料**を利用。
- ◆ 肉質・食味の改良、循環型社会への貢献等、訴求力の高い豚肉を生産し、販売力を強化。



家畜排せつ物の有効活用

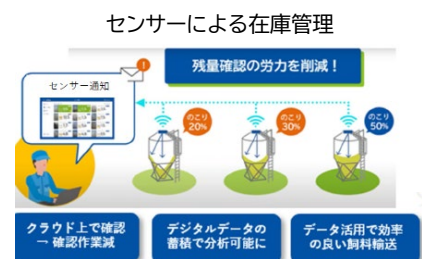
- ◆ 養豚由来の排せつ物は、年間約2,000万t。
- ◆ 国内肥料資源の更なる有効活用に向け、**堆肥の高品質化**や利便性・輸送性の高い**ペレット化**などによる耕畜連携が重要。



豚ふんペレット堆肥

物流への対応

- ◆ **生体の輸送距離短縮**のための産地処理、**アニマルウェルフェアに配慮した輸送**を推進。
- ◆ 突発的な発注・配送の削減等、**飼料輸送の合理化**につなげる取組を推進。





基本方針のポイント



● 疾病の予防と影響緩和

- ◆ **飼養衛生管理基準の遵守徹底**、野生動物対策、水際対策等により家畜伝染病の発生やまん延を防止。
- ◆ 疾病発生時の影響緩和を図るため、人・物・家畜等の動線を分けることで殺処分の範囲を限定する**農場分割**の取組を推進。
- ◆ 豚熱について、今後、関係者が連携し清浄化に向けた道筋を示す。
- ◆ 産業動物獣医師の確保・育成、遠隔診療の導入等、獣医療提供体制の整備を推進。

農場内や車両の消毒



野生動物対策



水際対策



● アニマルウェルフェアの理解醸成

- ◆ 豚を快適な環境で飼養し、豚の健康を維持することは能力の最大限の発揮による生産性向上にも結びつく。
- ◆ 国際基準に基づく「**豚の飼養管理に関する技術的な指針**」の現場への普及・定着を図る。



母豚を群で管理

● 薬剤耐性への対応

- ◆ 高度な衛生管理技術の導入や、ワクチン接種による感染症予防により抗菌薬の使用量は着実に減少。
- ◆ 引き続き**飼養衛生管理の向上**及び**抗菌薬の慎重使用**に向けた取組を推進。

● 畜産分野全体の動物用抗菌薬販売量(トン)の動き

